

テレビ番組におけるバラエティ番組の分類

—創成期—

鹿 島 我

A Classification of the Variety Programs in TV Programs

— The Genesis —

Ga KASHIMA

I はじめに

日本放送協会（以後、NHK）を除く民間放送において、ゴールデンタイム（19時～22時）プライムタイム（19時～23時）における番組構成は近年大きく変化しているが、その要因は大きく2つに分けることができる。

1つはプロ野球人気の衰退である。昭和30年代後半「巨人、大鵬、玉子焼き」という言葉があったようにプロ野球、中でも読売ジャイアンツ（以後、巨人）を中心とするプロ野球中継のテレビ視聴は庶民の娯楽の中心であり、安定して高い視聴率を誇ってきた。しかし、近年、プロ野球は巨人のような全国区の球団経営ではなく、東北楽天ゴールデンイーグルス、福岡ソフトバンクホークスのように地域の名称を球団名に付け、地域に密着した経営を行う球団が増えている。また、既存の球団も西武ライオンズが埼玉西武ライオンズ、本拠地を東京から札幌に移した日本ハムファイターズも北海道日本ハムファイターズと名称を変更した。この経営方針は成功を収め、観客動員数の増加はもちろん、地方局において、地元球団の試合の中継視聴率は高い数字を示している。プロ野球といえば、全国どこでも巨人という時代は終わり、地域に根付いたチームをその地域の人々が応援するという形が定着している。

そのため、全国ネット放送が当然であった巨人戦の視聴率は急激に低下し、全国ネット放送番組を制作する在京大手4局（日本テレビ、TBS、テレビ朝日、フジテレビ）は巨人戦の中継に代わるコンテンツの制作

に迫られ、バラエティ番組へのシフトを強化していった。

もう1つは2008(平成20)年に発生したいわゆるリーマンショックによる番組制作費の削減である。筆者が本学の研究紀要第49集で報告したように全国ネットワークを持つ民放5社（日本テレビ、TBS、テレビ朝日、フジテレビ、テレビ東京）はフジテレビを除き軒並み減収減益となり、番組制作費も大幅な削減を余儀なくされた。

放送業界は、以上2つの理由等から低予算で時間をかけずに制作できる番組としてバラエティ番組の強化に乗り出し、お金と時間をかけない新しいバラエティ番組を次々と誕生させていった。

また、これらの要因を受け、テレビ界は池上彰という新たなスターを作り出した。池上はNHKの局員であったが、常に画面に顔を出すアナウンサーという表方ではなく、取材に当たる記者、いわゆる裏方であった。池上は子どもにニュースをわかりやすく解説する「週間こどもニュース」への出演をきっかけに注目を集め、NHK退局後は自身の名がついた民放制作の番組に数多く出演、軒並み高視聴率を記録している。

筆者は前出の本学紀要第49集において、バラエティ番組を見分ける方法の1つとして「バラエティ番組を制作するのは制作と呼ばれる部署」と報告した。しかし、筆者も放送作家として制作に携わった池上彰の名を冠にした東海地区の番組において、制作を担当したのは報道局であった。番組の中身は明らかにバラエティであるにもかかわらずである。これらの結果を基に考えるとバラエティ番組に新たに「報道バラエティ」

という分類が誕生したと言える。しかも、定義において一部例外を設ける必要も発生した。

筆者はこれらの点を鑑みて、本稿において新たにバラエティ番組を定義・分類する基準が必要であると考えに至った。また、この機会を生かし、バラエティ番組を誕生から現在に至るまで分類してその系譜を作成しようとするものである。

今回は、その出発点ともなるテレビ放送の創成期における分類である。本稿では、テレビ創世記を1953(昭和28)年2月1日のNHKによる本放送開始からフジテレビが開局したことで主要全国ネット4局が全て開局を終えた1959(昭和34)年3月1日までとした。さらにNHKのテレビ放送開始から日本テレビ開局までを「第一期」。日本テレビの開局からラジオ東京テレビ(現在のTBS)のテレビ放送開始までを「第二期」。さらにラジオ東京テレビの放送開始から日本教育テレビ(現在のテレビ朝日)の開局を経てフジテレビの開局までを「第三期」とし、それぞれの期間におけるバラエティ番組の分類について報告するものである。

なお、創成期に放送された全ての番組を網羅することは困難なため、次の基準を設け、分類を試みる。

- ・原則として、週に1回定時に放送されるレギュラー番組である
- ・番組に関する何らかの資料が現存し、番組内容について調査することができる
- ・高視聴率、長寿番組などの記録、もしくは流行語を生み出す等、視聴者の記憶に残る番組である

以上をもって、創成期の番組をバラエティという基準において分類するものである。ただし、TV放送が開始された1953年(昭和28)年2月1日に関しては放送された全ての番組を検証する。また、対象とするのは関東地区で放送された番組であり、関東以外の地方のみで放送された番組は含まないものとする。

II 創世記「第一期」のバラエティ番組

1. 本放送開始日の分類

日本におけるテレビの本放送は1953(昭和28)年2月1日に始まる。NHKがテレビの本放送を始めたことによるものである。この日、放送された番組は新

聞の縮刷版等によると、次の通りである。

- 14:00 「開局に当たり」 挨拶：古垣鉄郎 祝辞：緒方竹虎 大野伴睦
「舞台中継」 菊五郎劇団「道行初音旅」
- 15:00 「テレビニュース映画」「米大統領就任式実況」
- 15:30 「歌劇よもやま話」 藤原義江 太田黒雪雄 松内和子
- 18:30 「歌」 古賀さと子
- 19:15 「天気の話」 和達清夫
- 19:30 「今週の明星」
- 19:30 「漫才」

この日、放送された番組を検証していくと、まず「開局に当たり」とは「NHK東京 テレビ開局の祝賀式」の中継である。東京都千代田区内幸町にあった放送会館の第1スタジオで開催された。NHK会長・古垣鉄郎のあいさつに続き祝辞を述べた1人・緒方竹虎は、当時の官房長官である。

この番組に続き放送されたのが歌舞伎の劇場中継「義経千本桜」的一幕「道行初音旅」である。尾上菊五郎劇団の尾上梅幸、尾上松録、坂東彦三郎らが出演していた。

その後、フィルム撮影された映像によるニュース番組「米大統領就任式実況」が放送されている。同年の1月20日に就任したアメリカ合衆国・アイゼンハワー大統領の就任式のものとして推測される。

15時半からは「歌劇よも山話」。オペラ歌手で声楽家の藤原義江ら3人による対談番組である。この放送終了後、夕方までいったん放送は休止している。

18時半に再開。「歌」古賀さと子とある。古賀さと子は「子鹿のバンビ」や「ピーコポン」のヒット曲で知られる当時12歳の童謡歌手である。時間帯から考えて子ども向けの童謡を歌った歌謡ショー的番組であると推測される。

19時15分からの「天気の話」に続き、19時半からは「今週の明星」とある。この番組名は同時帯のラジオNHK第一放送にもある。NHKのアーカイブスカタログによるとラジオにおける「今週の明星」は1950(昭和25)年1月に放送開始、当時人気を博していた公開型の歌謡番組である。日比谷公会堂でのラ

ジオ番組をそのままテレビ中継したとある。1つの放送局が同じ時間帯に同じ番組を異なるチャンネル、放送形式、放送媒体などで放送する「サイマル」放送である。新聞の縮刷版のラジオ欄によると出演者は霧島昇、笠置シズ子、高倉敏。その後の「漫才」もラジオと同時に放送する「サイマル」放送である。こちらもラジオ欄を確認すると戦前から活躍していた漫才コンビ、宮島一步・三国道雄による「極端な話」、落語はNHKラジオの「とんち教室」で活躍した春風亭柳橋による「そばや」とある。「そばや」というネタは柳橋が得意とした「時そば」であると思われる。この番組を持って、本放送1日目の番組は終了している。

以上の番組の中からバラエティ番組を選び、分類してみる。まず、間違いなくバラエティ番組に分類できるのはラジオとのサイマル放送「今週の明星」である。スタジオに観客を集めての公開歌謡番組ということから「公開バラエティ」に分類できる。その後の「漫才」は「演芸バラエティ」である。

「歌劇よも山話」も現在ほどのバラエティ感はないと思われるが、扱っている内容が「芸能」であることから「トークバラエティ」と位置づける。内容が政治や経済のように固い場合は単なる対談。内容が柔らかい場合はトークバラエティとする。

また、夕方に放送された子ども向け番組で古賀さと子の歌謡ショー的番組は「音楽バラエティ」である。

判断が難しいのが歌舞伎の劇場中継「義経千本桜」的一幕「動行初音旅」である。筆者は前出の紀要第49集において、バラエティ番組の定義を報告した。NHKにおいては「日本放送協会番組基準」に基づき「優れた芸能の保存と新しい芸術を開拓する芸能番組と身体的欠陥や地方に対して特に配慮を施した娯楽番組」と定義した。この基準に照らし合わせると「動行初音旅」はバラエティ番組に分類される。ただし、この番組基準が策定されたのは1959(昭和34)年である。放送を開始した時点ではまだ策定されていない。また、歌舞伎=日本の伝統芸能という重さと「バラエティ番組」という言葉が持つ軽さがミスマッチしてどうしてもバラエティ番組に分類することを妨げてしまう。さらに、NHKの経営方針と民放の経営方針は全く違う等、積極的判斷を鈍らせる要素が幾つか挙げられるが、次の3点を基に分類するものとする。

- ・テレビ放送が始まった時点では、民放もNHKも関係なく、技術面等非常に限られた状況で番組制作は行われた
- ・後に制定される日本放送協会番組基準はそれまで制作された番組に基づいて制定された
- ・NHKにおけるバラエティ番組の分類は機会を改めて行うべき課題であり今回は創成期における分類である。

これらの点から判断して、「道行初音旅」はバラエティ番組であり、「芸能中継バラエティ」と位置づけるものとする。

2. NHK 一局時代の分類

テレビ放送において、NHK 一局時代には、撮影技術、放送技術等ハード面に大きな進歩を期待することができないためバラエティ番組の制作にも多くの制限があったと考えられる。しかし、その限られた条件の中でその後のバラエティ番組に大きな影響を与える番組の誕生もこの期間に見ることができる。テレビが誕生して間もない時期に非常に高額であったテレビ受像機(いわゆるテレビ)の購入者にラジオにはないテレビの魅力的印象付け、さらに多くの購入者、視聴者を開拓していく必要に迫られているからである。それらの新しい番組は19時半以降の時間帯に多く見ることができる。

「三つの歌」(2月3日 19時30分～)

ラジオで放送されていた番組のいわゆるサイマル放送番組。収録会場にいる視聴者(聴取者)がピアノ演奏のみをヒントに正しく歌えるかどうかを競う。視聴者参加バラエティである。

「私の仕事はなんでしょう」(2月5日 19時30分～)

番組の詳細な内容は不明だが、日本のクイズ番組の第1号と言われている。朝日新聞の縮刷版には、石田アヤ、(内海) 突雄、柴田早苗、木々高太郎等の出演者が記載されている。クイズバラエティである。

「20の扉」(2月7日 19時30分～)

ラジオ放送から始まり、テレビ放送開始とともにサイマル放送となった。出演者は解答者となり、司会者

に様々な質問をすることで20問以内に正解を出すゲーム形式の番組である。クイズバラエティである。

「ジェスチャー」(2月20日 20時～)

白組、紅組に分かれて身振り手振りの表現が何かを当てるゲーム。テレビ創成期の大人気番組である。ゲームバラエティである。

3. 特徴

4つの番組により、新しく「視聴者参加バラエティ」「クイズバラエティ」と「ゲームバラエティ」という3つのジャンルが誕生した。「三つの歌」が「視聴者参加バラエティ」に分類されることはともかく、ここで、問題になるのが残り3番組が「クイズバラエティ」と「ゲームバラエティ」どちらに属するかの判断である。両ジャンルとも解答者が正解を導き出す過程と結果を見せる番組であることは変わらない。そこで、注目したのが「ゲーム性」と「クイズ性」どちらに重点が置かれているのかである。言い換えれば、演出サイドが視聴者に何を見せようと考えているかである。この観点から3番組を分類すると、正解を導き出せるかどうか、即ち結果を見せようとした「私の仕事はなんでしょう」「20の扉」は「クイズバラエティ」。身振り手振りのジェスチャーという面白さ、過程を見せよ

うとした「ジェスチャー」は「ゲームバラエティ」とすると分類した。

以上、ここまでの分類を図1に示す。

Ⅲ 創世記「第二期」のバラエティ番組

1953(昭和28)年8月28日、民間放送として初めて日本テレビがテレビ放送を始め、日本のテレビ界は2局時代を迎える。この章では、1955(昭和30)年4月1日にラジオ東京テレビ(現在のTBS以降KRテレビ)がテレビ放送を始めるまでの2局時代のバラエティ番組について、NHK、日本テレビそれぞれの分類を試みる。

1. NHK制作のバラエティ

この時期を代表するNHKのバラエティは次の番組である。

「こんにゃく問答」(1954年12月15日19時15分～)

とんちんかんなやりとりを楽しむ落語の演目からとった番組名。徳川夢声と柳家金語楼がご隠居と八つあんに扮して世相を斬る番組内容。教養バラエティに位置付ける。

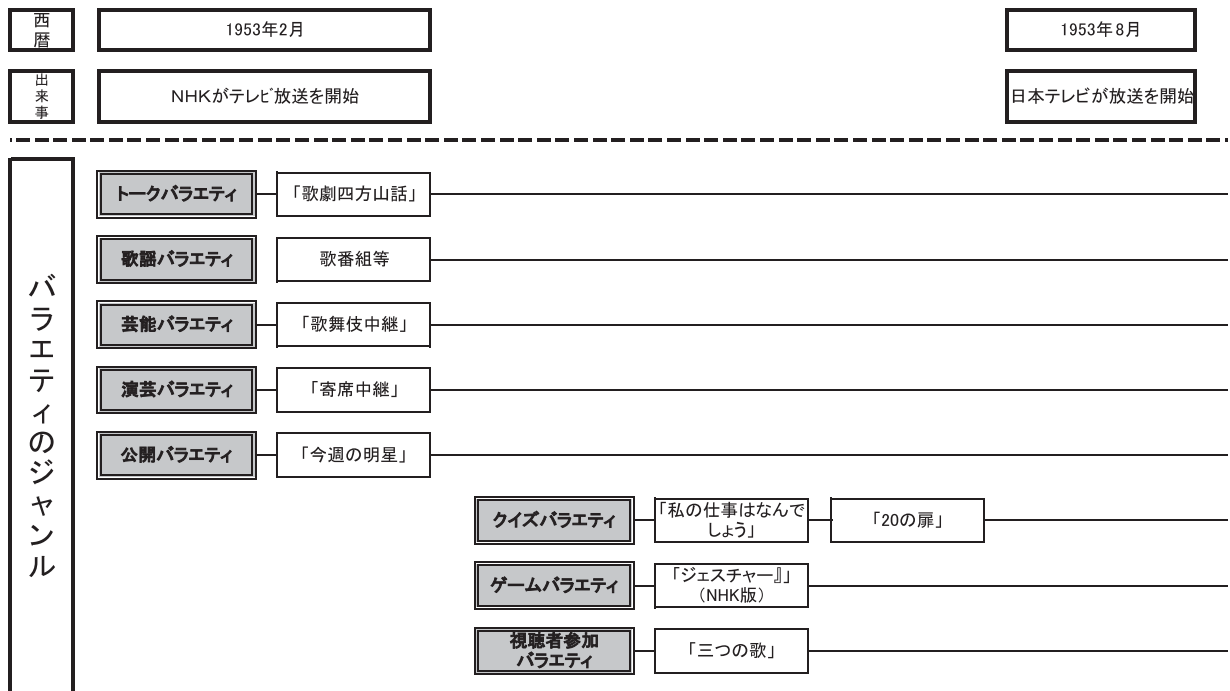


図1 バラエティ番組の変遷①

2. 日本テレビ制作のバラエティ

開局を迎えたばかりの日本テレビを代表するバラエティは下記の番組である。

「ジェスチャーゲーム」(1953年9月2日18時～)

NHKと同じタイトルの番組である。ゲームバラエティである。ジェスチャーを行い、それがなんであるかを当てるという形式もNHKと一緒だが、出演者がNHKが芸能人であるのに対し、こちらは一般視聴者という点が異なる。したがって、視聴者参加型のゲームバラエティに分類する。

「何でもやりますショー」(1953年9月5日19時30分～)

日本テレビ開局と同時に放送を開始。正式なタイトルは「ほろにがショー 何でもやりますショー」。視聴者が様々なゲームに挑戦し、達成すると賞金を獲得する。視聴者参加型ゲームバラエティである。

「シルエットクイズ」(1953年12月27日19時30分～日本テレビ)

映画や芝居の主人公に扮したシルエットをスクリーンに影絵のように映し出し、それが何であるか解答者が答えるクイズバラエティである。

3. 特徴

民放が開局してようやく2局時代を迎えたテレビ界だが、技術的には録画という手法は実用化されておら

ずバラエティ番組は全て生放送である。そのため、作り込んだ番組を制作することは困難である。

この状況下において、NHKは既に先行局として数多くのバラエティ番組を制作しているので、日本テレビの開局に合わせて新しいジャンル、新しいタイトルの番組を誕生させるということも行っていない。唯一取り上げたのが「こんにやく問答」である。しかし、この番組からNHKの番組制作が見えてくる。

出演者が二人だけという「こんにやく問答」は出演者の能力に依存した番組で能力の高い出演者を揃えることで一定のクオリティを生み出している。ラジオ放送、テレビ放送における先行局であるが故にが可能になったといえる。

一方の日本テレビは、その活路を一般視聴者に見出そうとした。一般視聴者が持つ意外性や爆発力に期待する演出であり、それは時には熟練の芸能人を上回る可能性も秘めていることは否定できない。さらに、ゲームを基盤にした番組制作である。ゲームはいったんルールを決めると、それを変更しない限り、カメラワークもほぼ毎回確定することができる。後発局のハンディをこうして補うことができる。

以上の点からNHK、日本テレビ、2局の事情が反映されたバラエティ番組が制作された時期と言えよう。

以上、ここまでの分類を図2に示す。

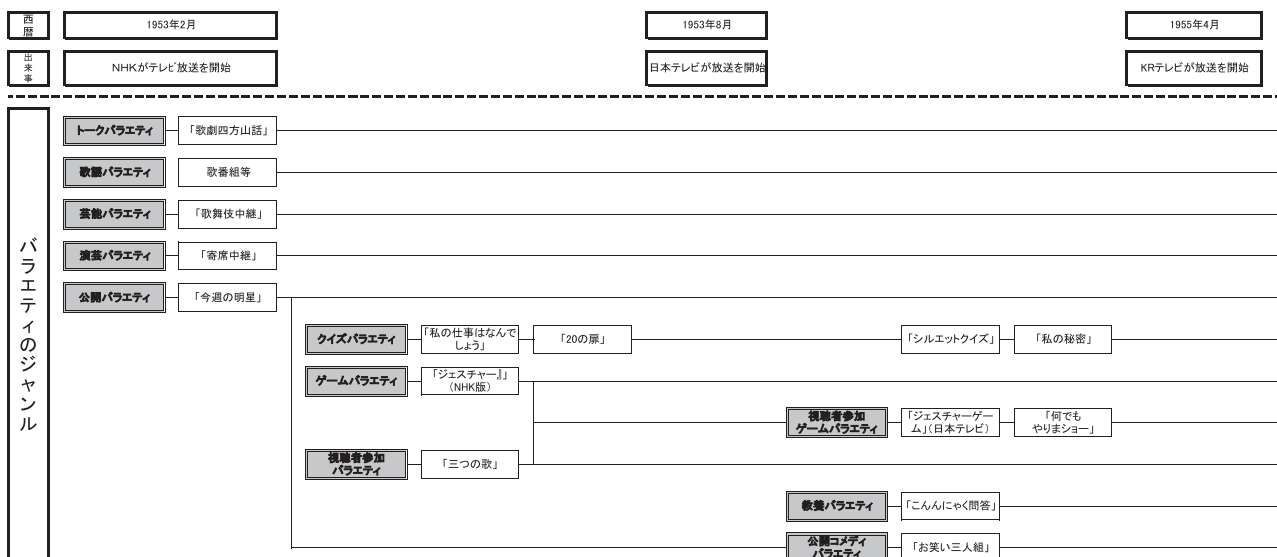


図2 バラエティ番組の変遷②

Ⅳ 創世記「第3期」のバラエティ番組

1955年4月1日にラジオ東京テレビ（以降KRテレビ）が開局してから1959年3月1日にフジテレビが開局するまでを「第3期」に分類する。本稿では、最も長い4年間分の分類となるが、バラエティ番組におけるジャンルに変化が見られるのは本章の後期に当たる1959年を迎えてからである。即ち1日10日、NHK教育テレビ放送スタート、2月1日、日本教育テレビ（現在のテレビ朝日）開局、3月1日、フジテレビの開局という3局時代から一気に6局時代を迎えるというまさに激変期前のことである。そんな4年間で1年ごとに検証してみる。

1. 1955年に誕生したバラエティ

「私の秘密」（1955年4月14日19時30分～ NHK）

珍しい体験や秘密のある一般に登場してもらい、どんな秘密を持っているか正解を求めていく番組である。クイズバラエティである。

2. 1956年に誕生したバラエティ

「お昼の演芸」（1956年4月11日12時15分～ 日本テレビ）

お昼の時間帯に放送された演芸番組である。番組を前半後半に分け、前半は漫才や落語等の演芸、後半は脱線トリオ（由利徹、八波むと志、南利明）のコントという構成である。公開生放送で収録には多くの視聴者が駆けつけた。演芸バラエティである。

「歌の広場」（1956年11月5日20時～ NHK）

毎回複数組の歌手が出演し、歌を披露する純粋な歌謡バラエティである。NHKホールで公開生放送された。

「お笑い三人組」（1956年11月6日20時30分～ NHK）

あまから横町を舞台に、落語家の三遊亭小金馬（4代目三遊亭金馬）、講談師の一龍齋貞鳳、ものまね芸人の3代目江戸家猫八の3人が繰り広げた公開シチュエーションコメディ。ジャンルの的にはコメディバラエティである。

「危険信号」（1956年11月10日19時30分～ NHK）

電車模型の前方に仕掛けられた針が周回して風船を割る前に与えられた任務を遂行するというゲームバラエティである。2人1組で挑む視聴者参加型の番組でもある。

3. 1957年に誕生したバラエティ

「源平芸能合戦」（1957年1月9日20時～ KRテレビ）

タイトル通り、ライバル関係にある2チームの一般出場者が源氏と平氏に別れて、歌謡、物真似、舞踊、浪曲、奇術など様々な芸能对決し優劣を競った。視聴者参加バラエティとゲームバラエティを複合させた視聴者参加ゲームバラエティである。

「私だけが知っている」（1957年11月10日21時～ NHK）

番組前半で展開される殺人事件の犯人を探偵局とそこに属する探偵に見立てた出演者が推理し、事件を解決するクイズバラエティである。

「ますらを派出夫会」（1957年12月12日18時15分～ KRテレビ）

今で言う家政婦にあたる派出婦の男性版、派出夫。ますらを派出夫会に応募してくる失業者と女性の経営陣との間で繰り広げられるシチュエーションコメディ。コメディバラエティである。

4. 1958年に誕生したバラエティ

「やりくりアパート」（1958年4月6日18時30分～ KRテレビ）

正式タイトルは「ダイハツコメディ やりくりアパート」。関西地区の大阪テレビ（現在の朝日放送）制作だが、関東地区ではKRテレビがネットしたことで視聴が可能になった。大阪の下町にあるアパートを舞台に、住人や管理人が巻き起こすドタバタコメディである。

コメディバラエティに分類される。ただし、関西を意味する上方という言葉をつけ加える必要がある。上方コメディバラエティである。

「光子の窓」(1958年5月11日18時30分～ 日本テレビ)

若手女優、草笛光子をメインに据えた歌ありコントありのバラエティ番組。番組の正式タイトルは「花椿光子の窓」。資生堂の一社提供のため、社章である「花椿」が番組タイトルの一部となっている。音楽ショーバラエティである。

5. この時期の特徴

バラエティ番組のジャンルを見てもわかるように、テレビ放送が始まって6年が経過しようとしているが、大きな進歩があったとは残念ながら言えない。出演者、制作者というソフト面のクオリティは間違いなく上昇しているが、残念ながら撮影機器であるカメラや録画システム等のハード面の進歩がそれに追いついていない。したがって、ジャンルが同じ番組が数多く誕生していると推測できる。

この状況下において、新たに誕生したジャンルが2つある。1つは「上方コメディバラエティ」である。この時期、関西地区でもテレビ放送は始まっているが、その関西地区の放送局が制作するコメディのネット放送である。この時期、関西のお笑い芸人が出演する漫才や舞台の中継は既に関東地区でも放送され人気を博していたが、シチュエーションコメディがレギュラー放送されたのは初めてのことであり、この番組以降、関西発のコメディバラエティがある種のブームを構築していくことになる。

もう1つは「音楽ショーバラエティ」である。エンターテイメントの世界におけるバラエティという言葉

の起源の1つでもある「様々な芸能を組み合わせたショー」という意味では、最もそれに近いジャンルが誕生したことになる。このジャンルもこれ以降、バラエティ界だけではなく、日本のテレビ界を代表する番組の誕生につながっていくことになる。

以上の点からこの時期こそ、準備期間を終えたバラエティ番組が大きく動き出す礎になった時期であるといえる。

以上、ここまでの分類を図3に示す。

V まとめ

バラエティ番組について開局から全国ネットの民放4局が開局するまでに絞り創世記として分類を試みた。画像受像機、いわゆるテレビが誕生したこと以外、ハード面での大きな進歩が見受けられない時代における分類である限り、ある程度ジャンルに偏りが生じることが推測してしたが、それでも開局する放送局が増加するに従いジャンルも増加していくと考えていた。

しかし、バラエティ番組の多くのジャンルはNHK、日本テレビの放送開始とともにほぼ形作られ、その形式を継承する番組がほとんどであったことは予想外であった。ハードとソフトの両面の進歩があって初めて画期的な進歩が実現することをあらためて実証した事例の1つであるといえよう。

また、ある程度予測していたことについては、現代のバラエティ番組において創世記の手法が受け継がれている点である。視聴者参加のゲーム、クイズというジャンルは今なおバラエティにおける定番である。た

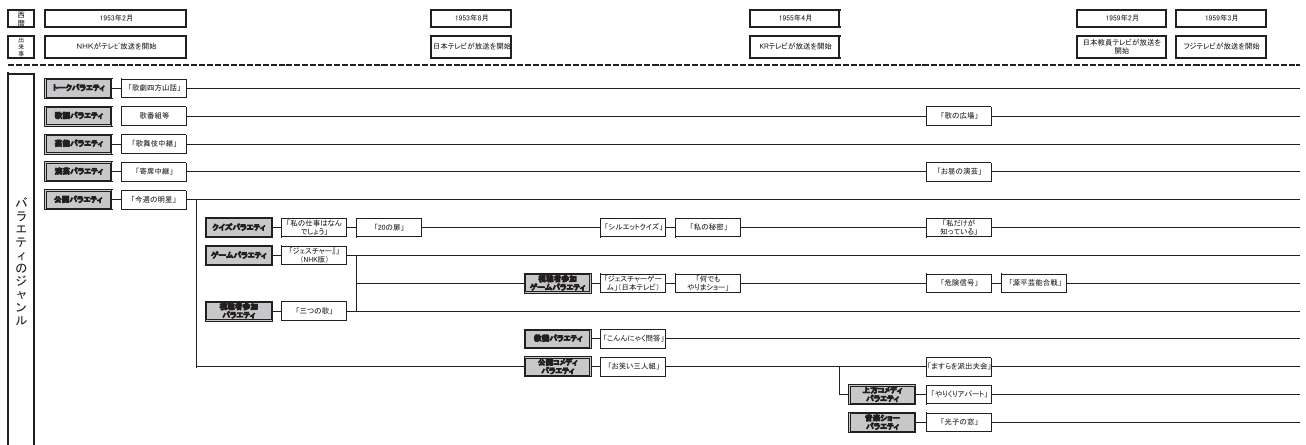


図3 バラエティ番組の変遷③

だ、当時は一般視聴者であった回答者が現代は芸能人にその役目を負わせている番組が多いように考える。

視聴率第1主義の番組作りが、番組が出演者を育てるという環境作りを妨げていようである。その結果として出演者の質の低下を招き、一般視聴者と同じレベルの出演者しか養成できていない。今後のバラエティ番組に突きつけられた課題の1つと言えよう。

今回は創世記に限定しバラエティ番組の分類を報告したが、これは筆者の研究におけるスタートにすぎない。今後は、過去のバラエティ番組の流れが、現代のバラエティ番組にどう連動しているのか、どのような過程を経て誕生に至ったのかに注目していきたい。その際は「録画技術の実用化」「カラーテレビの普及」「ENGの開発」などハード面での開発に加え、「皇太子ご成婚」「東京オリンピック開催」「万国博覧会開催」等の事象を織り交ぜて検証していきたい。

本研究が、放送作家として長年バラエティ番組の制作に携わってきた筆者の今後の活動に影響を及ぼすだけでなく、放送業界で活動する放送人の助けになればと考える。

参考文献

- 鹿島我 テレビ番組におけるバラエティ番組の位置づけ 京都光華女子だ大学短期大学部 研究紀要 第49集 pp.72
- 朝日新聞縮刷版 1953年2月～1959年3月
- 毎日新聞縮刷版 1953年2月～1959年3月
- 読売新聞縮刷版 1953年2月～1959年3月
- NHK アーカイブスカタログ 1953～2008年
- 高田文夫／笑芸人編 テレビバラエティ大笑辞典 白夜書房
- テレビ作家たちの50年 日本放送作家協会編 NHK出版